

YASUHIKO TABATA

勉強が苦手な少年時代 英語をきっかけて：

——まず小さい頃からの話を
おうかがいしたいと思います。田
畑先生はどのような子供時代や
大学生活を過ごされたのですか。
田畑泰彦（以下、田畑） 大阪の
京橋という、商売人の町のと真
ん中で生まれ育ちました。もの
すごくいかがわしい、柄が悪い
ところで、昔は日本刀を振り回
したりする者もいたりして、す
ごくアブナイところでした。

父は家具屋の二代目、後にイ
ンテリア関係の仕事に広げて
7、8軒のチェーン店を持った
り、不動産、貸しビルや貿易も
やっていた実業家です。私はそ
の一人息子、姉が一人いますが、

跡取りですね。しかし、勉強が
できなかった。小学校6年間で、
5段階評価で5をもらったのは
2回だけです。

——やはり理科ですか。

田畑 いえ、家庭科の料理と体
育の水泳（笑）。算数、理科は、
1とか2。なにしろ分数ができ
なかった。分数ができなかった
小学生でも、こうして大学の教
授になれるのだ、ということ
強調しておきたい（笑）。「おれは
頭が悪いんだ」とずっと思って
いました。だから落ちこぼれや
劣等感を持っている人の気持ち、
わかります。小さい時からでき
子って、私から言わせれば、エリー
トコースを歩いてきており、い
ろいろなコースを知らない。だ

研究者たちの素顔

Vol.05

田畑泰彦

Interview
村岡 秋元・松坂（東京理科大学）

『目標がない』 それが私の目標

研究分野のみならず、

テレビなどのメディアにも出演され、

多方面で活躍されている京都大学教授、田畑泰彦先生。

「自分の技術を伸ばすため何でもやる」

その言葉通り、境界領域とも言われる

再生医療の研究を進めるため、

工学、医学、薬学と3つ博士号を取得した

先生の原点は勉強がまったくできなかった

少年時代にあった——

から打たれ弱いですね。

このままでと商売を継ぐ
こともままならないと家庭
教師も付けてくれて、私立
中学校を受験したが、勉強
しないから落ちるのは当た
り前で、中学校は地元の公
立に進みました。以前、自
分の子供にばかにされまし
た、「パパ、そんな中学校に
落ちたの？」（笑）。「将来、
50歳になって、どっちが成
功しているというのではな
くて、自分が幸せに生活で
きるか、それで競争しよう
や」と言い返しましたが。

——その頃の夢は何だった
のでしょうか。

田畑 特にありませんでし

通信簿で算数・理科は1とか2でも、 こうして大学の教授になれる。

たね。毎日がとにかく楽し
ければいい、天真爛漫。学
校の成績は駄目、忘れ物ば
かりしている。親はずいぶ
んと心配したでしょうね。
とりえといえ、愛想がい
いところでしょう。商売人
の息子で、商人の町で育っ
たからでしょうか。ところが、
中学に入って、「自分はやれ
ばできるんじゃないか」と
思うようになったんですね。

——そのきっかけは？

田畑 英語です。その頃は
中学へ入ってから英語を初
めて習う。最近はもっと早
くから習ったりしますよ
ね。それを奨励されていま
すが、私は反対。
話は逸れるけど、日本語が話
せるから、日本語で考えるから、
日本人なんです。ところが、今
の日本語はものすごく乱れてい
るでしょう。日本語でまともに
話せない、考えられない。それ
が英語ならできるといって、
英語もろくすっぽできない。
そんな人間、どこの国の人かわ
からない。日本語で考えられて、
正しい日本語を話すというの
が、いちばん大切なのです。こ
れが日本人ということ。そ
のために中学くらいまでは、
まず日本語をしっかり勉強する
ことです。英語なんか要らない。
私はそういう方針で、自分の子
供には、小学生までは英語を押
しつけていません。

話を戻しますが、小学校の成

YASUHIKO TABATA

績が優秀な子も、できの悪い自分も、英語は横一線のスタート。そこに父が目をつけた。「こいつは劣等感ばかり持っているが、英語に関しては優越感も劣等感もない。英語の力がついたら、きっと他の勉強にも自信がつくだろう」と思ったのでしょ、うね、中学生になったら英語の家庭教師を付けてくれました。すると、中学2年頃から勉強の成果があらわれてきた。「あれっ？」って思うくらい他の子よりもできるようになった。「おれもやったらできるな」という体験ですよね。それからです、バァッと成績が上がったのは。だから、私は中2から、こんどは優越感を持つようになった。父が、「少しずつでも成績が

上がってきている。やればできることは、わかっただろう」と言う。やっぱり勉強したらいいのだな、おれもそんなに頭悪くないのだというのがわかったから、素直ですね。「うん、親父わかった」。すると父が、「もう一回、次の目標を立てろ。高校は、大手前高校へ行くように頑張れ」と。大手前高校についてもすごい進学校、京都大学に毎年100人は入るようなめっちゃくちゃ優秀な学校でした。しかし、とりあえず上を狙いたい、親父に言われることを見返し親父を追い越したいという気持ちで目指して無事入れました。

人間の体に興味を持ち 研究者の道を志す

中には硬い骨がある。骨ってセラミックスのようなものだと思うが、手の柔らかいところは何だろうと。有機物という言葉も知らなかったから、ゴムか人工皮革のようなものかと思ったのです。ゴムとか人工皮革とは何か、辞典で調べてみると、高分子と書いてある。「あつ、高分子なんだ。高分子化学を専攻すれば体をつくれるのだ」と思った。それでサイボーグ。

——お父様は、家業を継いでほしかったのではないのでしょうか？
田畑 父が「おまえは何がしたいんだ」と言うので、サイボーグとは言わなくて、人工血管をつくりたいと言ったのです。漫画にあるような、チューブみた

——その頃から、将来何をするかを具体的に考えられたのでしょうか？

田畑 父を超えること。といっても仕事やお金ではないませんから、違うことをするのは漢然と思っていました。高校生の時に、ようやく夢ができました。それがサイボーグをつくることです。

——その夢を持つきっかけは？

田畑 人間のからだに興味があったからです。祖父はがんで亡くなっていますが、父は健康で丈夫。からだ、病気が不思議だな、と。

——からだや病気に興味をもつと、ふつうは医師、医学部を目

指すのでは。

田畑 父は「理系なら医学部」という考えのようでした。私の人生は父を超えるようになるところから始まっているから、親父の言うことにはあえて従わない。そうすると、医学部はファーストチョイスから外れる。では何をしたいかといったら、からだのこと、病気のこと、新しい治療です。あるとき手をしげしげ見たのです。手は柔らかい、



中学3年の修学旅行で行った鎌倉にて。この頃、難関校を目指して猛勉強をしていた。(田畑先生は上段の左から2人目)

テクノロジーは工学部)にするのが工学だということ、医療材料やマテリアルサイエンスをやっているところ。それであがった情報が、京都大学で高分子化学だったのです。そこで、迷うことなく京都大学工学部高分子化学科へ入学しました。

これは後からの知識ですが、京都大学の高分子化学科は日本の高分子化学の草分けで、ピニロン^{*}を作った桜田一郎先生(故人)が名誉教授。桜田先生が教授のときの助教が中島章夫先生(故人)、その時、篠義人先生(現・京都大学名誉教授)はまだ4回生でした。日本の医工

学、バイオマテリアルをつくつたのは京都大学ですよ。工学部にも医学部のような医局制・講座制があつて、就職とか研究室に残るとかは、すべて先生の差配で決まった。大名の配置みに(笑)。工学部の応用化学というのは、医学と同じで基礎と応用・臨床があつて、より実学的なところがある。再生医科学研究所も、もとは医用高分子研究センター、生体医療工学研究センターというセンターです。京大医学部の整形外科と口腔外科、呼吸器外科、それと工学部の高分子化学が集まって、センターとしてまず認められた

条件は、国立大学で、理系なら理学部でなくて工学部—これは商売人の感覚でしょうか、サイエンスをテクノロジー(サイエンスで得られた成果を研究を進めて商品化するのがテクノロジー。サイエンスは理学部で、

^{*}ピニロン 世界ではナイロンにつき、番目 日本では初めて作られた合成繊維。吸湿性がありローブなどに利用されている。ピニロンはポリビニルアルコールをホルムアルデヒドで処理することで合成できる。

YASUHIKO TABATA

らい器量が小さかったのですね。ところが、たまたま医学部の友人と書店の数学書のコーナーで出会って、「おお、久しぶりだな。なんでこんなところにいるんだ」と聞いたら、「数学の問題でも解かなければ頭が腐る」と言う(笑)。医学部というところは、覚えることばかりなのだという。ものを考えていくということは少ない、そういう思考ではないのだそうです。また、友人に組織学の本を見せてもらった時「医学よりも工学、理学の先生が執筆者に多いのを知りました。やはり間違っているのかな。工学から医学に行ける、工学知識が医学にも必要だ。ポリバケツの研究もサイボーグに到達するのだと思

直すことの大きなきっかけになった。でも、あの頃、工学部の高分子化学の中で医用材料バイオマテリアルといったら、まったく市民権はなかったですね。——その頃の思い出深いエピソードとかありますか？
田畑 修士課程1年の時に話飛びますが、James Anderson 先生(現ケースウエスタンリザーブ大学教授)との出会いです。出会いといっても、こちらは学生で押しかけ同然でした。Anderson 先生は、現在アメリカの人工臓器学会の会長ですが、もともと工学博士で、医学博士との

授業では一番前の席に座って、顔を覚えてもらえ。一生懸命聴け。印象づけろ。

ダブルデイグリーを持つていた。日本でそんな人はいない時代です。バイオマテリアルの学会で京都大学に来られた時に、「私の人生について相談したい」と、紙に書いて、直訴ですね(笑)。「何だ、おまえ」みたいな感じでしたが、まあホテルで会ってくれました。「私は実は医工連携をやりたいので、篠先生を慕って京都大学に入りたいのですが、篠先生はまだ助教なので講座を構えていないから、これでは自分の夢がかなえられません。だから、私はアメリカへ留学したい。京都大学をやめるから、アメリカへ連れて

行ってください」と。そうしたら、Anderson 先生は、「篠先生というのは今、助教だけけど、これからは今、助教だけけど、おまえはそこへ行けば、おまえの道は救われる」と言われたのです。「日本では教授にしかつけない」と英語で言ったのですが、通じたかどうか。その当時、英語がはっきりと聞き取れなかった私ですが、Anderson 先生は、「そんな簡単な。何言ってるんだ。その先生について行ってやったらいいじゃないか」と言われたと思います。アメリカと日本の大学は違うから「それはできない」と言ったのです。そうしたら、「篠先生の授業をとっているか？」

のです。医学と理学との組み合わせはあるが、医学と工学が共同研究のセンターまたは研究所をつくるというのは、世界も例がなかったのではないのでしょうか。

——大学入試には苦勞されましたか？

田畑 当時は共通一次試験が導入される前、国立一校・二校の時代です。京都大学の場合、試験は3日間12時間、900点は満点でした。数学は5時間で3時間、気力と体力の勝負でした。入学試験時に最大瞬間風速を出す、そういう能力があったのと、センター試験がなくて助かった

今の学生は、「これが得意で他人には負けない」というのがあるのかな。

(笑)。得点のとれない科目は得意な科目で穴つめをして、トータルの得点で勝負する。国語ができなくても英語・数学では負けないぞ。優越感と劣等感を自分の中に併せ持っていたのが、ここでもよかった。でも当時の学生はみんなそうだったように思う。今の学生は何でもできるのだけれど、「これが得意で他人には負けない」というのがあるのかな。劣等感をもったことがあるのかな。この気持ちが必要ならば、落ち込んだ時立ち上げられないのでは。

——京都大学に入ってみていかがでしたか。

田畑 これはだまされた(笑)と。そもそも篠先生の研究に惹かれたといっても、具体的な専門もよくわからなかったし、篠先生は助教で1回生、2回生にはほとんどかわらない。高分子化学といっても、ポリバケツなんかのことばかり(笑)。人工血管はどうなったんだ、と。これは医学部に入り直したほうがよいのかしら、とずいぶん悩みましたが、工学部に決めた時点で自分自身で鎖国状態をつくっていました。医学、生物はもう封印してしまわないといけない、そっちに動いてしまわないよう、自分を封印して頑張らないといけないという感じ。だから、生物の本とか医学の本は一切読まませんでした。そのく

大学時代の友人たちと(田畑先生は左から2人目)。優越感と劣等感の両者をもつユニークな友達。現在、いろいろな分野で活躍している。これもよいネットワーク。



YASUHIKO TABATA

と聞かれた。「授業はとつています」「それなら、授業では一番前の席に座って、顔を覚えてもらえ。とにかく一生懸命聴け。印象つける。それで、その先生が講座を構えたらそこに入れ」というふうにサゼスチョンされたのですね。

これはひとつのエピソードで、転機となった出来事はいろいろあります。こんなふうには私はものすごく悩みが多い。しょっちゅう悩んでいる。自分のことについて、学生のことについて、将来について。周りからはまっすぐ走ってきたように思われているかもしれませんが、いつもこんなふうには悩んでいるとは周囲から見られていないでしょうね。実は私はよく悩

まえ自分のテーマを見つけたか。私は何回も言います。「どう」「どう」「どう」と言っています。学生がおもしろいことを見つけたら、「おお、それやろっ、それやろっ」。

——自分のやりたいことがわかってくるまで待つということでしょうか。

田畑 大学の場合にそれがいちばん大切。大学は研究だけではなく、教育機関でもあるからです。通常、うちの学生は最低3つぐらいテーマをやっています。一つは、本当に教科書に載るような新しいアイデアの証明。もう一つはその応用研究。最後は、共同研究者の材料作りのアシスト。私は頭の中では、

み、いろいろなことを気にする性格です。だから、目的がはっきりしないとい走れないのです。常に考え続けることで、チャンスを見逃さない

——先生の研究室での指導は、どのようになさっていますか。

田畑 博士課程に行って大学の先生になりたいのか、博士号を取って研究者として企業へ行きたいのか、学生によって要求のレベルは違いますが、研究指導はすごくきついと思います。材料学だけでも、モノをつくらせて確かめて終わりじゃない。デザインして、モノをつくって、生物学、医学、医療への応用も研究しなければいけないから人の2倍、3倍働くことが必要。

50人の学生がやっていることは全部つながっています。ディスプレイを毎週行っています。が「肝臓の〜」というようなテーマごとのグループではなく、水溶液、粒子、フィルムとかテクノロジーで分けています。毎週毎週、学生とディスプレイを回して、そのときに、「ああ、粒子うまいことやってない。そうしたら水溶液で行う。水溶液やっている誰か呼んでこい」「こいつに1週間教えてやってくれ」という感じでね。

研究室セミナーも、週一回ペースで行います。個別のディスプレイセッションは別の日にあります。セミナーの時にも、簡単に研究内容を話してもらい、質問の受け答えをします。その時に

それが再生医学工学分野です。「もう一回、調べ直してこい」「こんなこともわからないのか。それだつたらやめてしまえ。研究者やめろ」と怒ることはしょっちゅう。怒るけれども、フォローをこころがけている。ただし、「ああいうことを言ったら悪かったな」とは言わない。上下関係です。だから、そういうことを言ったらややこしくなるので。「最近どうだ、元気にやっているか」「これわからないから教えてくれ」「こわからぬいから教えてくれ」「教えてくれ、教えてくれ」と聞きます。「学生に教えてくれって、この先生アホじゃないか」と思われるとは、全然思っていないし、思われても別に平気です。

研究指導は、研究成果の将来

2つのことを学生に学んでほしいと思っています。一つ目は、学生が一人ひとり立って、私の質問に対する受け答えの練習です。もう一つは、学生が何をやっていくか、みんなに知らしめることです。みんなの問題、どこがおかしいのか、どこをやった方がいいのか、それをみんなにわかかってほしいのが、セミナーの意味ですね。「これ、先生、困っているんですけど」「ああ、そうだな。同じ困っているやつ手を挙げる」みたいな。そうしたら、みんな手を挙げますよ。「これだけ皆同じことで困っているんだ。あとで相談しておけ」。そ

私は常に問題意識を持っているから、「これは使えるのではないか」ばかり考えている。

それがセミナーです。セミナーには外の人を演者として呼んでいます。毎週、大学の先生、弁護士、弁理士、ブローカーとか。いちばん学生にうけた演者は、祇園のママさん(笑)。テーマは、なぜ京都に舞妓さんの文化が300年続いているか。舞妓さん・芸妓さん、あの人たちは若くして来て、ちゃんと修業をして、結婚したらやめなければいけないですね。江戸時代からずっと続いています。なんでそれが続いているかそういう話をしてもらおう。そういうふうにして、学生にいろいろなことを聞かせて勉強させるチャンス

の応用展開など具体的な話をします。例えば、工学部の学生に対して医学的、薬学的なバックグラウンドから出口に至るまで時間をかけて話をします。どのような分野があつて、今はここまで来ていて、私たちはここまで来ている。だから、これをやる。だからこれをやるか。あるいは、ここから行ってここへ行くか。どっちへ行きたいか。研究テーマは学生と一緒に決めるようにしています。しかしながら、最初は右も左もわかりませんので研究内容はトップダウンです。わからないと言ったらわかるまで、押さえつけじゃないけど、一度やってみようと言つて。1か月後、2か月後に、「お

YASUHIKO TABATA



田畑研究室のラボメンバー。医学、歯学、工学、薬学、などの異なる分野の人と企業人との混合チームからアイデアが出る。

を与える。そうすると優秀なやつ、目利きができるやつが増えます。これを期待していませんが。

——研究テーマの設定、アイデア探しはどのようにされるのでしょうか。

田畑 研究テーマの設定に対し

ては、ある程度の範囲はあります。でも、自分の技術が伸びるのであれば、私は何でもやってみます。ただ、それを始める時には、まず専門家と話す。あるいはユーザーの意見を聞いてみる。それをしなければ、とんちんかんかな目的のぼけた研究になってしまふ。

——ありふれたものを組み合わせること、誰もやっていなかったことがやれるということでしょうか。

田畑 難しいことを考えすぎないこと。自分しかできない技術を出すというのが、工学部の「偉い」なんです。自分にしかできない合成の方法であったりね。基本的なテクノロジは6

つくらいもっています。それは、[※]ハイドロゲルの徐放（P63参照）とか、[※]トランスフェクションとか、細胞の培養とか、固定化技術とか、そういうのは皆さんが理解できることですね。それをどうやって使うか、どうやって組み合わせるかだけの話なのです。私は、それは人よりものすごく考えていると思います。

たとえば、メガネがくもらないテクノロジがある、服のパチパチ防止のテクノロジがある、人工血管で血管が血栓で詰まらないテクノロジがある。

「ハイドロゲル」水を大量に含むゲル。「トランスフェクション」遺伝子を細胞に組み込ませ、タンパク質を産生させること。

これは全部違う学問分野のように見えるけれども、用いているテクノロジは同じです。何かわかりますか？

——コーティングでしょうか。

田畑 そう。だから、何を何のためにコーティングして、どういう実験をして、どこの企業と組んでどうやって売り出すかだけなのです。それがわかっています。いくらでも広がります。おもしろいように広がっています。それを常に考えろと学生に言っています。私は常に問題意識を持っている。だから、話をしているても、聞いていても、「これ使えるのではないか」ばかり考えている。それがものすごく楽しいですね。1回学会へ行つ

と来ますよね。聞いている情報と一緒にしよう。ただし、私はそれ以外にあります。それは、企業から世の中に出ていない最先端の情報もっています。これは、自分で作り上げてきたネットワークのおかげです。これは人よりものすごくアドバンテージがあります。

それともう一つ学生に言っているのは、器の理論。器といては、皆さんもうできてしまっているのです。大学卒業までに器をつくるのです。人間のネットワークの器、お金の器、情報の器。器に大きさはありません。これは精神的な大きさなのです。たとえばお金の器が、ある大きさであったと。ある人が5回のチャンスをつまつかみ取った

たら、アイデアが2、3個はつかびます。

本当かどうか知りませんが、人間というのは人生に5回チャンスがあるのだそうです。5回チャンスは、必ずどんな人でも、目の前を通り過ぎていく。それがつかめるかどうかというのは、どれだけ考えているかです。それをうまくつかみ、物事がうまく進んでいる人を見て、皆さんは「あの人はラッキー」「棚ぼた」だと言いますが、人生には「棚ぼた」などはないです。その人がそればかり考えているから、チャンスが目の前を通ったのがわかったのです。アイデアってそうでしょう。普通、同じように話を聞いていても、それでピンと来る人はピン

と。その結果、お金がバツとたまった。ところが、器が小さかったらお金はあふれてしまいます。だから損していく。人脈でも、最初から人脈の器をつつておけば、器が大きかったら、将来人脈ができて、絶対人脈は守れるのです。人脈が消えていくというのは、つくった器が小さかったのです。

——小さい器しかつくってこなかった人は、どうしたらいいのでしょうか。

田畑 今から器を足すことです。器が小さければ、器の大きい人を友達にすることです。自分のがあふれそうだったら、友達の器に入れておいて、必要な時に、少しずつ自分の答えに移

してあげばいいのです。あるいは、大きな器の人を使ってというか、友達の大きな器の中に自分の器をばんと入れたらいい。

——器を大きくするにはどうすればよいでしょうか。

田畑 自分の勉強にもならないけれども、いろいろなことを見てきた。先輩のお手伝いをしてきた。論文にもないけれどもお手伝いをしてきた。外人が来たら、自分が手を挙げて、外人と一緒にどこかに行ったりした。学生が来ても、関係のないに、しっかりと、ずっと時間を割いて話をする。そうしたこと、積み重ねて器が大きくなるのだと、私は信じて生きています。自分に対してためになるよ

人脈作りと研究は一日にして成らず

田畑泰彦

手紙を書くころ

僕は、教授になった時にビジネス本とか帝王学とか、ああいうのを手当たり次第読みました。リーダーとはどういうふうにか考えるのか。でも50冊読んでみてくささい、その手の本は全部同じだということがわかります。そうしたら、もう、頼るものがないんです。そこで出合ったのが時代劇なんです。やっぱり歴史小説、歴史物がすごくおもしろい。例えば、徳川家康と豊臣秀吉がいるでしょう。あの時代に、全国の人に以心伝心しなければいけない。そのときにどうやってやってるかといったら、手紙しかない。そうすると、いくら飛脚で走らせても、2、3日かかります。ということは彼らはそのぶん先を読んで手紙を書いているんですね、めちゃくちゃ賢いんです。そして毎日50通も60通も手紙を書いている。戦争のとき、ピンチになってから援軍をお願いしてもしかたないから、先をものすごく読むんですね。そういう時代の人なんです。彼らが総理大臣になったら、一発で日本が変わってしまうと思うんです。

今は携帯があつたら、すぐに何でもわかっていような気がなつてね。検索したら何でもわかつた気になる。それは絶対駄目。いまは、そんな時代だからこそ、直接行ってあいさつしたり、すごく印象に残ります。今の時代だから、ちゃんと人間性を出したら、ものすごく高く評価されます。狙い目ですよ、今こそ。ちなみに僕は、年賀状を全部手書きでちよこちよこって書いています。いつも800枚ぐらい書きまます、年賀状って書いています。一枚出した、それで1年つながるんです。たった50円、安いじゃない。そして年賀状というのは1日に着かないと意味がない。どんな忙しい人でも、1月1日は必ず年賀状を見ています。2日は見ないです。2日に着いた年賀状は年賀状ではない。わかりますか？ 携帯で年賀のあいさつ？ そんなの、「おまえ人間か」みたいな(笑)。

僕が学生によく言うのは、「真剣にやれ」ということ。例えば自分があるアイデアを持っていて、こんな実験がしたいと先生に提案しますよね。ところが、「何言ってるんだ、そんなのいかん」と言われてすぐ引き下がる。すぐあきらめられることは、そんなにやりたくないんです。好きな人ができて、お父さんに反対されたとして、引き下がりますか？ 何回も行きますよね。じゃあなんで実験はそうしないんだ、ということですよ。それは、真剣味が足りないという事です。何度も言ってくるなら上の人は、「おまえらまだ言ってるのか。そんなにやりたいならやれ」となりますよ。誰かに反対されて諦めるのは甘ちゃんなんです。

学生時代の僕は、先生に秘密の研究をいっぱいやっていました。今の学生さんというのは、言われたことをやりますよね。秘密の研究はあまりしない、でも本当は秘密の研究のほうがおもしろいんです。秘密の研究をやつて、いい結果が出たら、それで先生を喜ばせてやるという感じですよ。

おかげで、実は失敗談もいろいろあります。中でもあれば、前代未聞の事件でした。工学部の3年生のときに、化学系の研究室でスチレンか何かの重合をしていて爆発させて、棒温度計をロケットみたいに飛ばしたんです。そんなことをしたのは、後にも先にも僕だけですよ。「おまえ化学やめたいかんぞ」と言われたけれど、「絶対やめませんよ」と返したんだけど、「でも、おまえ、合成だけは行くよ」と言われてしまった。結局、合成に行きました(笑)。ほかにも、大抵のことはやつたつて平気です。だから、学生がなかややつたつて平気です。

諦めたらそこで...

いことを言ってくれる人を何人知っているかどうかでしょうか？ 同じ時間しゃべっても、しょうもないやつとしゃべるのだったら、家で寝ているほうがよっぽどいいですよ。

最後に、先生の将来の夢についておうかがいます。

田畑 新しい研究を進め、その成果を基礎にして、世の中の人を幸せにしたいですね。ビジネス化もその1つの大きな手段です。たとえば、もし自由になるお金ができたとしたら、それで財団をつくりたいです。私的財団を立てて、若い人の研究のサポートをする。医工連携科目を教育できるような学部ができるという。biomedical

engineering(生体工学)というのは、アメリカではあるけど、日本ではできないですね。そこで、私は自分の研究室の中でこの領域の研究・教育をおこなっています。研究室の中は教育機関みたいなものですよね。セミナーとかジャーナルクラブで、工学部の人には医学の勉強をさせて、医学部の人には工学の勉強をさせる、薬学部の人には工学の勉強をさせるとか。他にも、たとえば再生治療院とか、生体吸収性のハイドロゲルを使って再生治療するような病院をつくりたいじゃないですか。この治療であれば、企業が本気になるハイドロゲルはできるし、すぐに患者に届けることができますよ。この方法だったら再生



田畑泰彦(たばた・やすひこ)

京都大学再生医科学研究所 教授
1981年、京都大学工学部高分子化学科卒業。同大学院に進学し1988年に工学の博士号を取得。その後、京都大学医用高分子研究センター助手、同大学生体医療工学研究センター助教授を経て現職。教授就任後、2002年に医学、さらに翌年薬学の博士号を取得。

治療は本当に現実になるじゃないですか。「目標がないのが私の目標」と言っていますが、いろいろなことを並行して進めている。また、やりたいから、目標がどんな、どんな変わっていきまます。サイボーグでも、化粧品でも、ある目標があつて、その次にまた別の目標があつて、また

その次は...。そういうことで、目標がないのではない、具体的な目標というのは、段階に応じた目標というのは、段階に応じて作られていき、いっぱいあります。目標というのはそういうものだと考えています。

